

去年、約二十年の時を経て復活し、今年で二回目となる「蔵屋おろち花田植」が五月十九日に行われました。

花田植は、まずオロチの被り物をした人と稲を植える早乙女による行進から始まり、ほら貝を使ったヤマタノオロチの迎え入れ、牛三頭による田の入り作業、早乙女の田植えの順に行われました。

オロチの迎え入れでは、ほら貝を吹くと張り巡らされたワイヤーをたどって山々から様々な色をしたオロチが現れ、田んぼの上に集まりました。その後、早乙女による田植え作業では、唄に合わせて田植えが行われ、見物客を楽しませました。

蔵屋おろち花田植実行委員会の松浦昇会長は「二十年前に途絶えていた伝統、文化をこれからも続け、これから未来を背負っていく子供達に大自然の中で生きて、ものを育てる喜びを伝えていきたい」とあいさつしました。

風雨というあいにくの天候にもかかわらず集まった多くの人が、神話の里を感じさせる田植えの様子を堪能しました。

## ヤマタノオロチ 天から下る ~蔵屋おろち花田植~



▲空からオロチが集う

## 田植え行事 各地でにぎわう



▲「絶対に押すなよ！」



### 一味同心塾

### 十二年目の「稲の花」田植え

五月二十五日、上阿井にある一味同心塾にて「稲の花」花田植えまつりが行われました。

「稲の花」は同塾館長で料理研究家の中村成子先生の指導により同塾米づくり委員会がつくる無農薬米の名称で、今年で十二回目の田植えとなります。

神事の後、阿井地区の内容谷田植え囃子保存会の皆さんによる田植え囃子が披露され、中村先生は「国内では、TPPなど農業をとりまく環境に大きな動きがある。しかし、一味同心塾では、地域を守る身の丈に合った農業を今後も続けていきたい」と決意を語りました。

今回から島根リハビリテーション学院一年生も参加し、関係者や町内外からの参加者合わせて約九十人が、田んぼの泥に足を取られながら手植えに挑戦し、初夏の一日を楽しみました。



▲植田良二商工会長（左）と石川理事長（右）

## 町・しんきん・商工会 がっちりタッグ

五月二十四日、しまね信用金庫、奥出雲町商工会との地域振興連携・協力に関する協定書締結式が仁多庁舎にて行われました。今回の協定は、しまね信用金庫が策定した中期計画の方針に沿って提案されたもので、特産物のPRなどの観光振興分野、創業者支援、事業承継などの企業支援分野、認知症サポートや犯罪被害防止など地域福祉分野に関して三者での連携協力の協定書となっています。同信用金庫の石川茂夫理事長は「この協定を基に、これまで以上に地域を大切にし頼りにされる存在となるよう努力したい」と抱負を述べました。

## 災害時の迅速かつ的確な対応のための協定締結

国土交通省が進める災害時における情報交換に関する協定を、町と同省中国地方整備局と締結することとなり、その締結式が出雲市にある同省出雲河川事務所にて五月三十一日行われました。

式には井上町長と同事務所の館健一郎所長が出席し、それぞれ協定書に署名、調印をしました。

この協定により、災害発生時等の初動段階から相互の施設の被害状況など緊密な情報交換を行い、場合によっては中国地方整備局の職員を奥出雲町の災害対策本部等に現地情報連絡員として派遣できるようになります。館所長は「災害時に奥出雲町のニーズを的確に把握し、支援などの対応をより円滑に実施できるようにしたい」とあいさつしました。



## さくらおろち湖トレイルラン開催!

尾原ダム建設によってできたダム湖「さくらおろち湖」の周囲を走る「さくらおろち湖トレイルラン」が6月2日に行われました。

トレイルランは、整備された道路だけでなく自然の地形もそのまま利用するランニング競技で、今回はさくらおろち湖ポート競技施設をスタートとし、10kmのショートコースと20kmのロングコースが用意され、男女混合でそれぞれのコースを約30名ずつ、計約60名の参加がありました。

開会式で、さくらおろち湖トレイルラン実行委員会の田部隆義委員長から「今回初めてトレイルランを企画したところ、大勢の方に参加いただき、遠くは大阪からお越しの方も大変うれしい。レースの中で通る町などの雰囲気を感じていただいて、また観光にもいらしていただきたい」と歓迎の挨拶がありました。

参加者は、スタートの号砲に併せた松江城鉄砲隊・姫さま鉄砲隊による演武を楽しみながら、初夏のダム湖周辺の自然の中を力走しました。



▲▼のどかな草原や険しい山道など変化に富んだコース

